慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「人口論」の哲学思想
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.3 (1923. 3) ,p.414(102)- 437(125)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230301-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

親と無言のまゝ握手した。然る後に篤く款待のあらう。好意を謝した。彼の曰く『諸事萬端、如何にも整へり』と。Henry Mill は、物靜かに兄を迎へて、暫らく兩人は、大變面白く又慰められたらしく、物語つて居た。醫師の Bulmore が來られたので、彼は他の人々を室外に遠ざけて、弟 Henry の容態を問ふた。醫師は答へて『さあ、多分午前中位は持つでせう』と云つた。然るに午前中は無事に過ぎて、Henry に別條がなかつたので、Mill は醫師に向つて、『君の豫言は的中しませんでしたねえ』と云つた。」(Memories of Old Friends, p. 69)

右が、Fox 女史と John Stuart Mill との初對面に關する女史の記述である。兩者は、此日より次第に親密な交際を結び、種々の問題に就て討議を交へるに至つたのである。次號に私は、Fox 女史の日記を追ふて、其詳細ヶ紹介するで

「人口論」の哲學思想

津田誠一

一

正統派經濟學は其搖籃の時代に於て、本質的に相異る二種の哲學の影響を享けた。隨つて此學派が經濟上の自然主義、換言すれば自由放任の提唱を以て、其恆常の綱領と爲すは周知の事實に屬するも、其究極の源泉たる哲理的論據に遡及する時は、人々に依り自ら異同を存し又時期に應じて之を二期に大別する事が出來る。前期は即ち古代希臘の自然法說と中世以降の基督教思想の抱合に依つて生じたる自然神學的世界觀乃至人生觀が、經濟學說の背景を爲せる時代である。宇宙には其創造主たる神の明示或は默示する自然の秩序が有り自然の法則が有る。此秩序法則を透見して是に適應する順路を步む事が、軈て人類全般の福祉を增進し神の理想を實現する所以である。現世に瀰漫せる凡百の慘禍は、人爲の法則が自然の法則を攪亂せるに起因する。故に一切の拘束を撤去して、簡明なる「自然的自由の法則」を顯現せねばならぬと云ふのが其論旨の大要である。彼等に取つては自然なるものが則ち善なるものであつた。隨つてそれは、萬有が夫々神の豫め定めたる究極の目的を具有すと觀る目的論の見地に立つて、事物を觀照するものでなる。是に反して後期は斯かる形而上學的先驗的前提を悉皆排除し、快苦の計量を基礎とするベンタム流の功利主義哲學が、經濟學と緊密なる提携を爲せる時代である。ベンタムに從へば、「自然は人類を快樂及び苦痛と云ふ二個の主權者の配下に置いた。吾人が何を爲さんとするかを決定すると共に、又吾人が何を爲さねばならぬかを指示するものは唯此兩者のみである。」功利の原理とは此心理上の事實の認識に基き、「如何なる行爲にもあれ、是に關聯する人々の幸福を增加するか若しくは減退するかの傾向に依つて、該行爲を或は善として或は惡とする原理である。」「功利とは其關係者に便宜、利益、快樂、福利即ち幸福を賦與し(是等の語は此場合總て同一物である)、若しくは災禍、苦痛、害惡、即ち不幸(是等の語も亦同一意義である)の發生を防止する所の事物の性質を云ふのである。若し其關係者が公共團體なる時は功利は公共の幸福を意味し、特定の個人なる時は其個人の幸福を意味するものである。」而して「謂ふ所の公共とは、其成員なりと看做さるゝ個人

より成立つ假想的團體であるから、公共の利益とは畢竟其構成員の利益の總和に外ならない」。(Bentham: An Introduction to the Principles of Morals and Legislation. Works, vol. I pp. 1-2)。斯くして彼れの學說は結局、(一)正邪の標準は最大多數の最大幸福である。(二)各個人は一個に計量す可く一個以上には相當せずとの、二項に要約する事が出來る。彼は前揭の自然法說或は自然神學說の主張を獨斷的主觀的なりとして排斥し、獨り幸福の計量を以て普遍的客觀的なる唯一至高の倫理的基準と看做したのである。爰に於てか前者の抱懷せる目的論的觀照の態度は拋擲せられて、一切の事象を唯經驗界に於る因果の關係に依つてのみ省察する機械觀が採用せらるゝに至つたのである。固より如上の兩傾向は、其根本の立脚地を異にするに拘らず、必ずしも互に相排擠する事無く、却て屢々經となり緯となつて同一思想家の心胸に織り込まれてゐたのであるが、其大體の色調より見て前期を代表する者はアダム・スミス、後期を代表する者はリカアドオと言へよう。而して其時期に於て兩者の中間に出でたるマルサスが、其思想に於ても亦兩傾向の混和を示せるは、甚だ興味があるが決して偶然ではない。

マルサスの思索の究極の淵源は自然神學的目的觀であるが、是が解說に方つては功利主義的機械觀を採用する。彼に從へば「自然は一物をも無益には作つてゐない。如何なる欲望にも、若し吾人が之を發見し得る時は、夫々適當なる地位と適當なる滿足の存する事を知るであらう。情欲は幸福を生み出す素材である。故に百般の情欲は、宜しく之を調節し調和しなくてはならぬ。如何なる情欲も根絕す可きにあらざるは勿論、其强度を輕減する事すら不可である。唯情欲を滿足せしむるに方つて、或る方法に從へば其結果が平均的に一般の幸福を助長す可く、又他の反對方法に從へば反對の歸結を招徠するものである。而して前者は是れ明に自然の命ずる方法である、蓋し功利こそは、吾人が聖書を離れて有する唯一の行爲の指導者であるからである。吾人は決して如何なる衝動をも撲滅してはならぬ。然し同時に吾人は一衝動を追求するに急なるの餘り、同一程度に吾人の注意を要求する所の、他の法則を侵犯するの過誤に陷つてはならない。或る衝動の追求に際し何れの程度が將して中庸を得たる乎、何れが過大又は過小に失するかは、唯自己並に他人の經驗に依つてのみ了知する事が出來る。自然は苦惱的の結果を連續せしむる事に依り、或る行爲の誤れる所以を吾人に警告するのである。例へば疫癘の流行が食物の不良、家屋の非衛生、排水の不完全を指示し、又消化不良が過食を指示するが如くに、人口の過增に伴ふ慘禍は、簡明に違法者を反省せしむる自然の法則であると云ふのである」(Bonar: Malthus and His Work. pp. 319-320)。以上はマルサスの基本的觀念であつて、諸般の思索は總て此源泉より流露するのである。

二

創世記に從へば神は人類を創造したる後、「生めよ繁殖よ地に滿盈よ」と祝福しゐる。然るにマルサスの所論に依れば、食糧の增加が人口の增加に追隨し得ざるが爲に、必然人口制限の起る可きを云爲する。是れ明に神意と矛盾するものでは無い乎。斯かる事が有り得るであらう乎。全智全能の造物主が自家撞着に陷るが如き事が有り得るであら乎。此物質界を一貫して、其各部分が絕對完全の調和を保てる一の組織に構成したる後、其造物主が故意に萬物の靈長たる人類を

して、此宇宙の調和を攪亂せざれば止まぬ法則に、服從せしむる如き事が有り得るであらう乎。自然を支配し得るに必要なる總ての能力を人類に賦與せる後、更に反對に人類をして自然の奴隷たらしむる如き法則に服從せしむる事が、神の意圖の一端で有り得るであらう乎 Caret は如上の論據に立ちてマルサスの所論に搏擊を加へてゐる(Haney: History of Economic Thought p. 291)。又「神は一個の口と共に一對の手を與ふ」とは、俗諺の敎ふる所である。然らば乃ち食糧を需要する人口の增加する每に、之を供給する生產力も隨つて增加す可き道理である。故に人口過增は杞憂であり、道德的抑制は無用であるとは、「人口論」に對する世評の一端であつた。私は如上の批判は慥に肯綮に當れるものと認容する。換言すればマルサスの出發點たる神學的前提と、其到達したる悲觀的乃至消極的結論とは、到底若干の矛盾を免れ得ざるものと解するものである。乍併、私は暫らく卑見を後段に保留して、先づ一應はマルサスの辯明を靜聽しよう。

彼は云ふ「人口が食糧を凌駕して增加する不斷の傾向有りと云ふ學說の承認を妨ぐる主要なる理由の一は、神が自然の法則に依つて生物を生存せしめたる以上は、又同じく自然の法則に依つて此生存を維持せしめ得ざるものと信ずるは甚だ不可解であると云ふに歸着する。乍併、是等の法則に依つて產業上に偉大なる活氣と指示を受けたる上に、更に是に隨伴せる派生的害惡が、常に吾人の注意を人口制限の適當なる手段即ち道德的抑制の上に牽引しつゝある事を思ひ、又進んで此自然の光と理性に依つて指示せられ、且つ天啓に依つて確認裁可せられたる義務に儼正に服從する事に依り、一切の害惡を除去し得可き事が闡明する時は、此反對は撤回せらる可しと余は確信する。異敎の道德家は德行の媒介あるにあらざれば、幸福なるものは決して地上に於て享受し得ざるものとなし、就中深慮を以て諸德の第一位に置き、或は之を以て他の一切の德を包含せるものと思惟する者すらあつた。基督敎に於ては吾人の現在並に將來の幸福は、吾人をして一層高尙なる享樂を味ふに足る者と爲さしむる諸種の德行の發揮に依つて、獲得出來るものとしてゐる。隨つて假令深慮の全體ならざるまでも其主要なる一分枝たる、情欲を理性の指導に服從せしむる事を、最も懇切に勸奬するのである」と(Malthus: An Essay on the Principle of Population. 2d ed. Ashley's ed. pp. 99-100)。

即ちマルサスの辯明に從へば、一方に性欲其物を是認し他方に道德的抑制を力說するも何等の不可無く、前段の基本的觀念に合致するものである。結婚に對する欲求を抑制し調節せよと云ふは、決して此欲求のみを特殊的に取扱ふにもあらず、又其自然性を否認するものでも無い。飢餓或は渴渴を癒するにも、合法的と不規則的との差別がある。其不規則なるものは自然的法則に依つて處罰せられ、更に偷盜の如きは人爲的法則に依つても併せ罰せられる。而して社會が斯かる處罰を賦課し得る唯一の論據は、其行爲が一般の幸福を損傷する傾向有るを以てである。此繩墨は他の欲望、例へば結婚欲に對しても適用せられねばならぬ。思ふに食糧に對する欲望に次で、最も强烈なる又最も普偏的なる欲望は結婚に對するそれである。吾人が若し人類の大多數が不斷に激甚なる勞働に從事せる事に思を致す時は、假に美味なる食事、溫暖なる家屋、或は黃昏の爐邊の團欒と云ふが如き、日中

の勞苦に潑溂たる刺戟を與へ、興味と愉快を鼓舞する事情が皆無なりとせば、人類幸福の源泉は最も慘酷に減退せらる可しとの印象を、肝銘せざるを得ないのである。今結婚欲は這個の幸福を生み出す素材であるから、ゴドヰンの如く其根絶を期望するは固より、其强度の輕減すら不可である。唯此欲望を不當に追求する時は、當に自家一身に此幸福を確保し得ざるのみならず、更に累を其儕輩並に彼等の家族に及ぼし、公共の福祉を減退せざるを得ない。是れ功利の原理に背戻するが故に、道德的抑制の必要爰に生じ、且つ自然の配劑の巧妙なる、一旦斯かる不當の追求に逸する時は、忽ち慘禍を續發せしめて其抑制を警告する　宗教は神に對する畏怖に始まり、神に對する敬愛に終ると云ふのである。

加之人口と食糧との增加速度の相違も、マルサスに依れば、地上に人の子を充滿せしめんとする造物主の目的に、最も良く適合せるものである　若し豐沃なる土地の生產力が人口の增殖力に優に拮抗し得る時は、第一に人類は貧瘠なる土地を開拓し、或は魅惑無き土地に居住する誘因を喪失するであらう。第二に其產業と才能とに最も肝要なる刺戟を缺如したであらう。然るに實際は兩種の增加力に懸隔有るが爲に、人類は是に伴ふ禍害を惧れて一箇所に雲集するを避け、洽ねく世界に其種族を汎布するに至り、又其能力を最大限に發揮して文化を增進し、一層多數の人口が一層多數の幸福を享受するに至ると云ふのである(Bonar: op. cit., pp. 321-323)。

且つマルサスの眞意が人口の減少其物を謳歌するにあらざる事は、次の言辭の明示する所である。曰く「論者或は余の著書の究極の目的は人口制限に在りとなし、恰も罪惡慘禍を伴はざる人口の增加をも、尙制限するに如かずと云へるが如くに想定する者有るも、こは大なる誤謬である。言ふまでもなく余の究極の目的は罪惡慘禍の輕減に存し、余の示唆せる制限は此目的を達成せんが爲の、手段たるに過ぎざるものである。理性の優れし人士に取つては、人口に對する思慮深き制限を自然的制限と看做す點に於ては、彼等が全く不滿不充分に思ふ所の貧窮及び夭折より生ずる制限を、自然的と看做すのと寸毫も差違は無い。故に聰明なる讀者は當に人口を實際減少せざるのみならず、更にそれが不斷に增進しつゝある狀態を改變する事無しに、一種の制限を以て他種の制限に代位せしむる事の可能なるを容易に悟るであらう」と (Malthus: Appendix to the 3d ed. of P. of. P.)。

今前叙の辯明に依つてマルサスの眞意を掬するに、彼は衷心、若しそれが許されるならば、健全にして合法的なる人口の增加を希求する點に於て、敢て人後に落ちなかつたのである。唯躁急淺慮の人口增加は慘禍と墮落に導き、究極に於て最も劣惡なる樣式を以て人口を制限せざれば止まざるに依り、極力之を排斥せるものである。爰に於てか Leslie Stephen は彼れを辯護して云ふ、吾人はマルサスを精讀する事に依つて、Darwin に示唆せられたる進化論と、マルサス自身の所信との近似を考慮せば、一層良く彼れの眞意を會得する事が出來ると思ふ。兩者の間には、一見感知せらるゝ以上に甚だ酷似せるものがある「人口論」の初版は後版に撤回せられたる二章を以て結論となし、彼れの學說の哲學上の應用を披瀝してゐる。彼は此處に云ふ、「現世は心の試練の爲で無く、心を創造形成する爲の神の偉大なる過程である」と　それは Buter の思惟せる如く受難の場所にあらず、却つて高尙なる資質が徐々に發達する所である。ゴドヰン

は先に Franklin の所言を引用して、「心は何日か物質を支配するに至る可し」と云つたが、マルサスは「神は物質を心の中に組み入れつゝあり」と爲すものである。兩者の相違は前者が害惡を以て偶然の過誤より發し、理性に依つて除去し得可きものと看做すに對し、後者が之を以て智的活動の力強き原因となる肝要なる刺戟と解する點に在る」と（Stephen: The English Utilitarians. vol. II pp. 161-162）、畢竟マルサスの主張を極めて好意的に、極めて樂觀的に解釋すれば、第一に彼れ自らが聖典に啓示せられたる神意を奉戴して、健全なる人口の增殖を希望する。第二に自然の攝理は啻に此神意に牴獨せざるのみならず、却つて微妙なる調和を示し、樣々の外部的肉體的刺戟を以て、內部的精神的の向上發展を促してゐる。故に最後に、此神の啓示、自然の刺戟を正當に理解受容して、可及的多數の人口が可及的多量の幸福を享樂し得る社會の實現に、努力する事が人生至高の義務であると云ふに歸着する。

乍併人類が如上の義務を遂行せねばならぬと云ふ「當爲（ゾルレン）」の問題と、事實人類が如何なる程度にまで此義務を遂行する可能性ありやと云ふ有るがまゝの「在（ザイン）」の問題とは、自ら別個の觀念である。マルサスの自然神學的目的觀は或は多少の樂觀を許容し一閃の光明を投ずるにせよ、彼れが活社會の省察に採用せる功利主義的機械觀より來る結論は、所詮陰鬱なる色彩を離脫し得ない。洵に彼は「當爲（ゾルレン）」を說くに強く「在（ザイン）」を說くに弱きものである。是れ「人口論」の或る章節に前叙の如き辯明的言辭の散在せるに拘らず、尙其全般より享くる印象の甚だ陰慘なるを免れ得ざる所以である。マルサスの哲學的思辨の矛盾弱點は爰に胚胎するものと私は解釋するのであるが、尙それは彼れの功利主義思想を檢討したる後に論及するのが順序であらう。

三

正統派經濟學が其成立の當初より功利主義哲學と密接なる關係を保てるは、既に再々繰言せし所である。最大多數の最大幸福なる觀念は、夙にアダム・スミスの胸奧にも深く浸潤してゐたのである。Haney は云ふ「若し一方に自然的なるものと、他方に便宜或は實利的なるものとの間に牴觸を認むる場合には、スミスは常に後者に左袒した。彼は有益と云ふ事の中に、正當と云ふ辯證を求むる傾向があつた。謂はゞ彼れの說く所の自然哲學は、究極に於て功利の基礎に立つものである。作併、彼は決して Bentham. Ricardo 及び Mill の如き意味に於て功利主義者とは云ふを得ない。蓋し其思索は彼等の如くに徹底的合理的にあらず、又 Bentham や Mill の案出せる快苦の計量と云ふ觀念は毫も抱懷せざりし故である。畢竟彼れの功利の觀念は、其自然哲學の面紗を以て蔽はれたる觀があつた」と（Haney: History of Economic Thought.p. 218）。私はスミスに於ては飽くまでも自然哲學の色彩が濃厚であると思惟するに依り、必ずしも如上の Haney の見解を何等の修訂無しに許容せんと欲するものでは無いが、尙功利の觀念がスミスの思索に重要なる役目を演ぜしは、否むを得ざる事實である。而して此觀念は、彼れの衣鉢を承繼せるマルサスに至つて一層熾烈を加へた。畢竟スミスに於ては自然神學的形而上學的思辨が强く表面に顯現し、功利主義的觀念は仄かに裏面に潛在せるを、マルサスに及んでは寧ろ其反對に功利主義思想が擡頭橫溢して、稍もすれば自然神學的思想を掩蔽壓倒するかの觀を呈するに至りしものである。而してそはリカア

ドオに及んで全然形而上學的色彩を排除し、專ら卑近なる功利の原理と提携するに至るまでの、極めて順當なる推移の道程と云ふ可きである。

マルサスは「Paley に一致して、「德行は明に造物主が吾人の支配の下に置ける素材より、人類幸福の最大多量を抽出するに在り」と爲し、更に是に加へて「吾等の自然的衝動は、抽象的に考慮せらるゝ時は皆善である。唯其結果の如何に依つて差違を生ずるのみ」と附言してゐる。彼はベンタムの所言に倣ひて飢餓は、それが吾人を導びいて他人の肉片を盜ましむると、自己所有の肉片を喰はしむるとに關せず、それ自身に於ては同一のものであると述べてゐる。彼はゴドヰンに讃同して道德とは「結果の計量」を意味し、諸行爲の幸福に及ぼす效果を考慮する事に依つて、神の意志を發見するの謂ひである と爲すものである。即ち理性は結果を豫知する能力を與へ、以て吾人をして或る種の固有の、且つ實際上改變し難き本能を調節するに至らしめると云ふのである。是等の諸點に於てマルサスは全然純眞なる功利主義者と其見解を一にし、其所說を自明の理と看做すもの、如くである」(Stephen: The English Utilitarians vol. II pp. 156-157)。斯くして彼に從へば「抑々造物主の意圖が其被造物の幸福を確保するに存する事は、一半は聖書に依り一半は經驗に依つて明瞭である。吾人は須く此明確なる目的を助成しなくてはならない。神の側に於ての目的論は、人間の側に於ては功利である。功利は道德の基準原理である。功利即ち最大多數の最大幸福なる觀念其物は情欲では無いから、それ自身行爲を爲す事は出來ない。然しそれは極めて强く情欲を調節する。私有財產制度結婚制度其他吾人の最も重要なる法律慣習は、皆此功利の原理の變形に過ぎざるものである。動物として吾人は自然の命令、即ち放縱なる情欲に服從する。然し理性的生物として吾人は、其行爲の結果を顧慮する至大なる義務を負ふものである。其行爲が自己並びに他人に害惡を齎す時は、斯かる情欲に耽溺するは「吾人の地位に適應せざる事、換言すれば神の意志に合致せざる所以」を、正しく會得するのである。故に道德を遵奉する社會の一成員として、吾人は其情欲の放肆なる追求を抑制して適當なる方向に轉向せしめ、其結果を周密に査定し、屢々功利の原理に照應して其情欲の滿足が害惡を伴はざる樣に、又明に「人類の幸福を助長し神の明確なる目的を遂行する樣に、努力する慣習を徐々に獲得しなければならない。此原理こそ吾人が神の明示せる意志（即ち聖書）より分離して、或る情欲に耽溺するの可否を知る可き唯一の試金石である。隨つて又それは、自然の啓示より蒐集し得たる近世の百般の規範の中にて、最も確實なるものである。」約言すれば既述の神學的前提は、吾人を牽制して其情欲を調節し當に自己の個人的幸福のみならず、進んで人類幸福の最大多量を獲得せしむ可く刺戟してゐる。隨つて或る行爲が一般の福祉を增進或は減退せしむる傾向は、該行爲の道德的價値を決定す可き唯一の標準であると云ふのである(Bonar: Malthus and His Work. pp. 326-327)。

今功利主義哲學の嚴密なる方式に照らして檢討する時は、マルサスが其人口制限の種類を罪惡慘禍並に道德的抑制の三樣に分類するは不合理では無い乎。何に故彼は殊更に罪惡と慘禍を區別するので有る乎。慘禍を招致する行爲は罪惡では無い乎。否進んで功利の原理より云ふ時

は慘禍を招致すればこそ罪惡となるのでは無い乎との非難、又例へば無產兒性交の如き直接快樂を伴ふも然も何等の苦痛或は慘禍を伴はざる制限を、罪惡の列伍に入るゝは不合理では無い乎との非難、其他總て斯かる細密の、或は餘りに專門的に逸する倫理學上の質疑に關しては、私が論議する器材で無いと同時に、本論文の大綱と重要なる關係を存しない。私は次に利己と公共の福利とが如何にして階調を保つかに就き、マルサスの見解を省察せんと欲するものである。

四

姑くアダム・スミスに從へば、「吾人は宇宙の隨所に最も巧妙なる詭計を弄して、手段と其達成せんとする目的とを合致せしむる自然の妙諦を看取する事が出來る。自己保存と種の汎布、是れ自然が總ての生物の作成に方つて志望せる二大目的である。人類は此目的を欲求する念と、是に背馳するものを嫌忌する念とを、併せ賦與せられてゐる。生の愛着と死の恐怖、種の永續恆存の希求と其絕滅の嫌忌　是れ皆天賦の性情である。然し吾人は斯の如く上記の目的に對する至大なる欲念を賦與せられてはゐるが、此目的を達成す可き適切なる手段の發見に就いては、緩漫不確實なる理性の決斷には委ねられてゐない。自然は專ら本源的且つ直接的本能に依つて、吾人を是に導くのである。飢渴、兩性間の情欲、快樂の愛好、苦痛の恐怖、是等が自づから適當なる手段を採擇せしめる。而して該手段が。是に依つて偉大なる自然の神の達成せんと企圖したる慈愛深き目的に及ぼす效果に關しては、人間は毫も考慮しないのである」と（Smith: Theory of Moral Sentiments. Bohn's Library. p. 110）又曰く「各人は他の何人よりも自己を顧るに適に適當であるから、各人は自然に依つて、第一に且つ主として、自分自身の愛護を慫慂せられるのである。それ故に誰しも他の何人に關する事よりも直接自己に關與する事項に對しては遙に大なる興味を覺ゆるものである。是と同樣に自然は、宇宙の諸事象を考察する事を以て人類の主要の責務とはせず、却つて僅に之を時々の慰安事とせるに過ぎない。人間の主要の責務は、彼れ自身の日常生活の事項を處理するに在る。然も幸にして人間は、斯く自己の利益のみを專ら追求する間に、目に見る能はざる手の誘導に依つて全然彼れの企圖せざる目的、即ち公共の福祉を增進するに至るものである。若し人間が最初より故意に公共の福祉を目指して之を爲さば、決して斯かる好結果を招徠しなかつたであらう」と（Bonar: Philosophy and Political Economy. 2d ed. pp. 162-163）。

吾人は是と類似の思想をマルサスに於て見出す事が出來る。彼れも亦利己と公益との調和を自然の妙機に歸するものである。以爲らく、「其總ての業績の上に滿ち溢るゝ叡智を示現せる大自然の創造主は、此問題をも決して一般的結果の考慮と云ふ、冷淡にして且つ投機的なる手段に委ねる事をしない。自愛心を博愛心よりも比較にならぬ程强烈にする事に依つて、神は直に吾人を驅つて人類の種族保存に必要不可缺なる行爲を、嫌應無く爲さしむるものである。若し生れ出づる總ての人の子に充分なる資料を給付し得るならば、疑も無く神は他に施與せんとする欲望と、自己を扶持せんとする欲望とを、同一程度に熱烈ならしめたであらう。然し現存の事情は是と相反するに依り、彼は先づ各個人が其第一の目的として彼れ自身の安全と幸福、並に自己と直接の關係有る者の安全と幸福とを追

求せん事を命令する。而して其範圍が縮小し有效なる援助を與ふる力が增大するに從つて、其與へんとする欲望も同時に增大するを見るは洵に絕妙の配劑である。例へば其兩親の扶助と保護を要請する權利を持てる子女に對しては、兩親の情愛は殆ど自愛に等しく强烈なるを常とする。親子の中に於ては僅少の變則の場合を除き、最終の一食も尙等額に分配せられるであらう。

此賢明なる攝理に依り、如何に無智なる者と雖不知不識の間に全般の幸福を增進するに至るのであつて、若し彼等の行爲の主要の動機が博愛にありと假定せば彼等は全然此目的の達成に失敗するであらう。洵に博愛を以て行爲の不斷の大なる源泉たらしめんと欲すれば、原因と結果に關し最も完全なる知識を要す可く、隨つてそは唯神にのみ期待し得可き事である。若し人類の短見を以て敢て之を行はんと欲すれば、そは絕大なる過誤に陷り、文明社會の美事なる旣墾地は須臾にして貧窮と混亂との荒凉たる場景と化するであらう」と（Malthus: Appendix to the 3rd ed. of the P. of P. Ashley's ed. 114-115）。

即ちマルサスに於ては自己の幸福、自己の救濟を以て最緊急事となすは、各自の獨立心責任感を皷舞し、社會の寄食者を減退する所以である。假に他人に與へ度き欲望と自己に與へ度き欲望とが均等なりしとすれば、人類は社會の全成員に對する生存資料を準備する事業に當るを得なかつたであらう。然るに實際は各成員が全成員に對して生存資料を準備する事が不可能なればこそ、全成員が先第一に自己の爲に準備する傾向を生じたのである。博愛心が自愛心よりも强大なる事を萬人に希求するが如きは、畢竟社會の全成員をして社會の寄食者たらしめ、相率ゐて窮乏の淵に轉落せしめんと欲するものである。かのゴドヰンの抱懷せるが如き生存權幸福追求權等を是認し、利己の代りに他愛を以て原則とする社會の實現は、何等の防遏無しに激增する人口に充分なる生存資料を給付し得る狀態を假想せば洵に理想の極致に相違無きも、現實の事情に照應すれば、畢竟一片の空夢に過ぎず、又假令實現するとも、百害有つて一利無きものである。故に利己を以て第一義とせる自然の攝理に順應する事が、人類に許されたる限度に於て、公共の福祉を增進す可き最捷徑であると云ふのである。

從來功利主義哲學に對して加へられたる最も有力なる非難の一は、此學說の出發點たる「各人自己の爲に」"each for himself" と云ふ觀念より、其理想とする「各人全體の爲に」"each for all" と云ふ觀念へ通ずる架橋の缺如せし事である。然るに一旦神學的色彩を是に加味する時は、此難關は容易に突破する事が出來る。前述の如くアダム・スミスもマルサスも共に利己より公益に通ずる道を神の攝理自然の妙諦に歸してゐるのである。乍併、斯かる共通類似の思想を抱有せるに拘らず、尙終局に於て前者が樂觀的積極的色彩の顯著なるに對し、後者が悲觀的消極的色彩を拂拭し得ざりし事を看過してはならない。そはゴドヰンの空想を擯斥するマルサス自身が、如何なる社會を可能的最善の狀態と思惟せる乎。又此狀態に達する難易に關し、什麼の信念を保持せるかを見れば自ら闡明せられるであらう。

五

マルサスは現存社會組織の下に全成員が完全に道德的抑制を遵守する事を以て、吾人に許容せられたる理想の境地と看做し其縮圖を展開し

て云ふ、「試に各個人が古代の最も聰明なる哲人が自然の法則より抽出し、基督教の聖典に依つて直接教示せられ且つ權威有る裁可を與へられたる諸般の義務を嚴正に遂行し、以て各自の幸福の獲得に力むる如き社會の模樣を假想せば、そは吾人が現在目視するとは甚だ異れる場景を呈するであらう。如何なる行爲と雖即刻一時の情欲を滿足せしむる代りに、窮極の苦痛を加重する惧れあるものは義務の違犯と看做されるであらう、隨て何人も如何に熱烈なる戀情に驅らるゝも、僅々二人の子女を扶持し能ふ收入を以て四五人の子女を支持せざる可からざる如き地位に其身を置く事は無いであらう。若し思慮深き制欲が一般の採用する所とならば、勞働の供給を縮少し自然其價格を騰貴するであらう。結婚延期の期間は一個人の欲望を充足するに足る以上の貯蓄を爲し、且つ誠實勤儉の美德を涵養する事に費され、久しからずして結果の憂惧無く婚姻し得るに至るであらう。此種の消極的制限の作用は、假令人口の不斷の增加が持續するとも常に之を食糧の限度內に抑止し、勞銀の騰貴に眞實に價値を與へ、又勞働者が結婚以前に貯蓄したる金額は、かの勞銀の强制的騰貴、或は敎區の專斷なる施與の如くに其量額と其範圍との擴大するに隨つて一般生活資料の騰貴を伴ふが如き弊は無いであらう。斯の如く勞銀は優に大家族を支持するに足り、夫妻は緊急事に備ふる額を貯金し得るを以て、總ての慘憺たる赤貧は社會より驅逐せられ、或は尠くとも如何なる深慮先見も力及ばざる不幸に陷れる人のみに限られるであらう」。(Malthus: op. cit., 2d ed. Ashley's ed. pp. 100-101)。

即ち人爲的の慘禍罪惡は假に根絶し得るにしても、尙マルサスの理想社會に於ては貧富の懸隔、地位の不平等は依然として存在するのである。加ふるに其實現の可能性に關しても、亦斷乎たる信念を缺如せる觀がある。彼は其學說が悲觀的傾向を高調するとの非難を嫌忌するの餘り、極力辯明を試みてはゐる。即ち「假令將來を判斷し得る唯一の論據たる過去の歷史の追想が、社會の根本的改善の期待を殆ど不可能ならしむるも、余は寧ろ人類の根抵に深く潛める種々の困難は、其天性の遊惰を叱正し其才能を助長し其精神を激勵善化する爲に存在するものと解釋したい。中正の意見の抱懷者は厭世家の如く絶望に走り易きものでは無い。彼は一層穩當なる期待を保持してゐる。最善の社會狀態と最惡のそれとの比較、並に現在最善の狀態に在るものも尙進んで向上の餘地ありと爲す明確なる類推は、不斷に彼れの精神に最大の忍耐を鼓舞するに足る豫望を送るであらう。彼は人間を圍繞する多くの困難有るを知り、一の目的を達せんとして屢々他の目的を失し、社會の或る部分は急速の進步を爲せるも他の部分は比較的停滯せる事を知り、彼は不斷に此失敗に對する警戒を怠らぬ。かゝる失敗は絶望を作らずに唯知識を作り、彼れの熱意を阻止せずして却つて是に一層賢明確實なる指針を與へ、其人類に關する見解を廣濶なる一般的根據の上に築き、一部一局の挫折に依つて其見解を變ずるが如き事は無いであらう。假令頽廢的時代に在りても恐らく彼は一方に罪惡が存在頻發すると等しく他方に善德が實在普及せるを確信し、最後に至るまで過去の歷史が、其伴へる總ての反證にも拘らず、尙明に保證するかに見ゆる所の社會改善の正しき所信を改めないであらう」と述べてゐる(Malthus: Appendix to the 3d ed. Ashley's ed. pp. 122-123)。

私は如上の辨駁にも拘らず、尙其言外にマルサスの憂鬱なる色調を感知せざる能はざるものである。コンドルセイは歷史を十時代に劃し人心の進步を以て其共通的事實と看做し、ゴドヰン又人類の完全性を以て自明の理と爲し極めて簡明に理想社會の到來を確信せるに比すれば、マルサスは過去に諸惡の蟠蜷を認め、前途に不測の難關を豫想し、其見解に霄壤の杆格を存してゐる　彼は吾人の努力を激勵はするが、窮極の效果を約定する點に於て曖昧である。彼れが自ら勸奬する道德的抑制の普及に、自ら疑念を保持せる事は後に再言する。畢竟私はマルサスに於て見性悟道の三昧境に悠遊する超人の怡樂よりも、寧ろ荊棘に傷き瓦礫に轉迭しつゝ、尙目的に向つて精進する求道者の苦惱を見出すものである。彼は道德的抑制の介入に依つて思想に一大轉機を劃せりと稱するも、それは單に第一版の所說に比較して憂鬱なる色彩を緩和せりと云ふに止まり、決して之を一掃したのでは無い。成る程彼は人口の壓迫が人智の進步を刺戟するものと思惟する點に於ては、通常解釋せらるゝ如き消極論者では無いが、尙且つ其言辭を借りて云へば、人類は結局「幸福と慘禍の間を搖動し、凡ゆる努力の後依然其憧憬する目標より遙遠の距離に停まる」ものとの見解は遂に其胸奧より消失する事無かりしものと想定するが至當である　私が先にマルサスの自然神學的目的觀と、其功利主義的機械觀とを對峙せしめ、兩者の間に掩ふ可からざる空隙有りと看做せる理由は一に爰に存在するのであるが、次に彼れと其前後の哲人との思索を對比する事に依つて、一層這般の消息を明示したいと思ふ。

六

Cliffe Leslie がアダム・スミスの思想の淵源を論評して、「若し大自然の法則は調和に滿つとの古典的觀念が、神學的觀念を混入する事無かりせば、」彼れの哲學は決して然く樂觀的なるを得なかつたであらう。偉大にして仁慈に富める全能の神が大自然の總ての運動を指揮し、且つ是に依つて常に幸福の可能的最大量を獲得せん事を期するものとの觀念あればこそ、始めてスミスは人類の自然的性向並に利己的感情の自由なる活動より生ずる結果が、經濟上有益であり公正であるとの思想を徹底的に普偏化するを得しものであると云へるは、洵に正鵠を穿てる至言である（Cliffe Leslie: Essays in Political and Moral Philosophy. p. 26）。換言すればスミスの自然神學的觀念は、其活社會の省察に用ゐたる歸納的考究の結果が樂觀的積極的なるに依り、始めて整然たる理路を保有するのである。成る程スミスは其目的觀と機械觀とを調和せしめんと欲する爲に、屢々其歸納的考究の對象を自論に便なるものにのみ限局したとの非難はあるが、そは彼れの觀照の態度其物に對する非難であつて、斯くして構成せられたる彼れの學說自體には、尠く其自然神學的觀念と歸納的實證的結論との關する限りに於ては、何等論理上の矛盾は無いのである。

次にマルサスの終生の論敵たりしゴドヰンは如何と云ふに、彼は Calvin 派の神學說を遵奉するものである。即ち神は理性である、現世には神の豫め定めたる因果律に依る必然的の宿命が有る、神の王國は道德的共產主義であるとゝ見解を保持し、社會の歷史的觀察を以て無用と爲し、唯其哲理的觀察のみが一層高尙であり一層本質的に重要なるものと考へた（Max Beer: A History of British Socialism. vol. I p. 115）。斯くして彼は理性の萬能と人類の完全性とを高調

し、此極端なる樂觀的見地に立つて這二無二其論歩を進めた。隨つて其理想は餘りに空想に逸し幾多の缺陷を具備せるも、尙其神學的觀念と樂觀思想とは決して階調を破つてはゐない。

然るにマルサスに於ては是と趣を異にする。曾に彼れの許容する可能的最善の社會の態樣自體が尙若干の暗影をとどむるのみならず、此狀態に到達する道程に於ても、幾多の難關の伏在を豫想し多量の危惧を包藏するものである。成る程スミスが一方に利己心を是認し乍ら、他方に其公共の福趾を毀損するに至る時は是れが自制を要求せる事が、決して自家撞着では無いのと等しく、マルサスが性欲其物を是認し乍ら、尙其過大に失する時に道德的抑制を要求したればとて。それのみにては毫も矛盾と云ふを得ざる道理である。唯前者が利己心の自由活動並に他の原因に依る其自動調節が、自然に積極的に人類の福趾を增進す可しと云ふ甚だ樂觀的なる見解を保持するに反し、後者が辛うじて社會改善の唯一の光明と認めたる道德的抑制すら、尙其完全なる普及發揮に關して多大の不安と疑惑を覺ゆる悲觀的色彩を淸掃し得ざる所に、兩者の本質的差別がある。又自然の刺戟に依る人類社會の文化的發達を云爲する點に於てマルサスに若干の積極的思想有りとするも、此刺戟を享受し此發達を實現せんが爲には多量の苦艱を豫想せしむる所に、依然彼れの學說には光明の啓示よりは暗雲の低迷を覺えしむるものがあるのである。畢竟マルサスが、其哲學的思辨に矛盾無からしめんと欲すれば、專ら自然神學的目的觀を中心としてスミスと等しく樂觀論を提唱するか、或は全然ベンタム流の功利主義的機械觀を採用してリカアドオと等しく悲觀論に徹底するか、二者其一を擇ぶ可きであつたのである。然るに彼は此兩傾向の間に首鼠兩端を持し、之を折衷せんと欲して却つて破綻を曝露せるものと云ふ可きである。仁慈なる神の攝理を前提とする神學的色彩と、マルサスの學說の基調たる悲觀的色彩とは、如何に彼れが辯明是れ力むるとも、決して渾然たる融合を示してゐない。私は之を以て「人口論」に表現せられたる哲學思想の最大矛盾と斷ずるものである。

七

最後にマルサスの政治哲學に於ては、常に個人が第一義であり制度は第二義である。私は再び論敵ゴドヰンに與へたる彼れの書簡を引用しよう。曰く「現在一般に認めらるゝ人類の諸制度の缺陷に關しては、余は決して社會に於る憂苦の大部分が該缺陷より發生するものと思惟するを得ない。――總ての人類の諸制度は恐らく悉く不完全であらうから、又從つて常に非議の標的と成るであらうから、獨り現存の諸制度に對してのみ、余の判斷し得る限り全然それの罪にはあらざる所の害惡を楯に取て、攻擊を加ふるは慥に不公平である。故に凡そ人類の諸制度に關して改革を提議するに當つては、豫め可及的精密に何れの程度まで害惡が該制度の罪であり、又何れの程度まで全然是れと無關係なるかを確める事が、最も緊要の事と余は信ずるものである」と(K. Paul: William Godwin. vol. I pp. 324-325)。

彼は更に進んで一切諸惡を政府の罪に歸する事は、勢ひ暴君政治を導く所以である。若し庶民をして慘禍の唯一原因は政府にありと信ぜしめば、彼等は必然全責任を統治者の上に課し、隨つて其權力を無限に增大するの恐れ有りと考へた。固より彼は自由放任學說の頑迷なる固執者にあらず、例へば敎育國營制度、貯蓄銀行設置、

相互組合創設の如き悉く彼れの熱心に主張せる所なるも、そは偏に各個人の自覺を促し自立を強むるに明確適切なる積極的效果有りと信ずる故である。そは常に個人の道義的觀念を助成し峭育する從屬的地位に置かれてゐる。個人は究極の變更し難き單位であつて、其利害關係のみが總ての社會改革の唯一の支點である。又實際個人が一般に善良であるならば、如何に劣惡なる制度も何日かは彼等の善良性に適合する樣に自然に改革せらるゝものである。然るに反對に個人性を以て社會の作り出すものと看做し、是に責任を轉嫁せんと欲する如きは自然の秩序に逆抗するものものと云ふのである。

斯くして彼は政治哲學に關するゴドキンの「形而上學的研究方法」を排除し、科學的研究方法を以て是に代位せしめしものである。即ち總ての政府は外部より一種神秘的に侵入し來りて、何に故にか自然の秩序に由々しき不調和を導けるものとの觀念を退け、彼は事實如何、法は如何にして發展せる乎。又其理由如何を研究したのである。而して是に對する彼れの解答を約言すれば、現存の法規秩序及び不平等は、若し是れ無くんば人類を絶望的貧困と鉛沈の狀態に陷らしむる傾向を制限するに、絶對的に必要であつたと云ふに歸着する」(Stephen: The English Utilitarians. vol. II p. 175)。

以上の所言に徵して明瞭なるが如く、彼は「安定」と「平等」とを兼備し得る時は幸甚なれども、若し兩者を併有する事の絶對に不可能なる場合には、前者を採擇し後者を抛棄するが功利の原理に妥ふ所以と思惟せる點に於て、ベンタムと其見解を等しうするものである。蓋し古典派經濟學徒の通有性は、所有の安定が產業の自由發達を增進せしむる第一要件たる事に確乎たる信念を有し、それが他方に於て、特に所有が獨占の形態に近付くに從つて、資本家側に於る自由競爭を阻止し勞働者側に於る勞働の機會を不安固ならしむる事の爲に、產業の完全なる發達に對し障碍たるに至る可き事を透見し得ざりし點に在る。其原因は恐らく彼等の時代に於ては未だ產業革命の初期のみを見たる結果、特權の排除、自治權の獲得、貿易及び出版の自由の公認等凡ゆる消極的自由を獲得する事のみが既に改革家に取つて久しく且つ至難の懸案たりし爲と、又資本主義的經濟組織が其光輝燦爛たる明快なる半面のみを豫望せしめて、是に伴ふ陰鬱暗黑なる他の半面を指示する程に發達してはゐなかつた事に基くであらう。乍併、マルサスが個人の責任を重視し力說せる功は沒却するを得ない。蓋し如何なる社會に於ても、究極は個人道德と知識の向上を俟つて、始めて其幸福を實現し體驗し得可きものであるからである。唯彼れが之を以て不平等不公正なる經濟組織社會制度の恆久的擁護に曲用せる所に、甚大なる缺陷は存するのである。私は爰にマルサスの學說に關する紹介叙述の大要を終つた。續いて「人口論」批判の章に入り、彼れの時人幷に後人の論議を檢討しつゝ、結局それが現代に於て如何なる意義、如何なる價値を保持するかを究明せんと欲するものである。

社會思想家としてのジョン・ラスキンの生涯（三）

奧井復太郎

九

愚を爲す者は、其の態度の如何に拘らず其の